論　文

虚構の社会
── メイクビリーヴ説の社会哲学への応用 ──

成　瀬　　翔
日本福祉大学　社会福祉学部　非常勤講師
名古屋大学　大学院文学研究科　博士研究員

On Societies of Fictions
－An Application to the Social Philosophy of Theory of Make-Believe－

Sho NARUSE
Part-time Lecturer, Nihon Fukushi University
Postdoctoral Fellow, Nagoya University, Graduate School of Letters

Keywords：ケンダル・ウォルトン，ジョン・サール，虚構，ごっこ遊び，社会哲学

Abstract
When we examine the theory of fiction, we usually consider the impact on arts and literatures. However, the most famous theorist Kendall Walton has attracted the attention other than arts and literatures. This paper considers an application of the Walton's theory in social philosophy.
The contents of this paper are as follows. In Section 2, I will examine theory of make-believe. In Section 3, I will purpose an application to sports of theory of make-believe. Finally, in Section 4, I will consider John Searle ’ s idea: brute and institutional (or social) fact. And, I suggest that theory of make-believe is beneficial in social philosophy.

１．はじめに

ケンダル・ウォルトン（Kendal Walton）のメイクビリーヴ説は藝術理論，美学のみならず，言語哲学や形而上学を含む多岐にわたる哲学の諸分野に影響を与えている．ウォルトンは藝術理論から出発し，1990 年の著作 Mimesis as Make-Believe（邦訳『フィクションとは何か』）は英語圏の藝術理論・美学のみならず，哲学全般に影響を与えている[(1)]．ウォルトンの理論は，虚構を語ることがある種のごっこ遊び（game of make-believe）に他ならないということである．ウォルトンによれば，われわれは虚構の対象や出来事が現実には存在しないと知りつつ，その虚構の設定に従って虚構を生み出す．その見解の根底には，現実を認識しつつもある設定を受容し，それに従って虚構を生成するというウォルトンの発想が存在する．以下の議論において検討するが，この発想をウォルトンは現実の事実を認識すること

に相当する「信じる（believe)」と対比される，「信じることにする（make-believe)」という心的態度によって説明する．すなわち，われわれは現実についてはそれが事実であると信じているが，虚構についてはそれが事実であるとは信じていない．しかし，われわれは虚構の出来事が事実ではないにもかかわらず，あたかもそれが事実であるかのようにふるまう．メイクビリーヴ説は，このような虚構と現実という二重性ないし両義性を人間の心的態度によって解き明かすことを目指す．

本稿の目的は，ケンダル・ウォルトンのメイクビリーヴ説を社会哲学に応用することにある．この応用の試みには2つの目的がある．1点目に，スポーツや音楽鑑賞などの人間社会における文化的領域にメイクビリーヴ説を応用することである．通常，スポーツや音楽鑑賞などの領域は，物語や詩を読んだり，映画や絵画を鑑賞したり，舞台を演じるなどの虚構の典型例とは区別される．しかしそれにもかかわらず，スポーツや音楽鑑賞の場面において，われわれは虚構の典型例に接するときと同じく，ある種のごっこ遊び的態度をとっていることを示唆する．これにより，われわれの社会生活における文化的領域にメイクビリーヴ説を応用することが可能となることが期待される．

2点目に，われわれが現実世界における事実と呼ぶ出来事ないし行為に，二重性が含まれていることを明らかにする．ここで参照するのが，ジョン・サール（John Searle）の生の事実（brute fact）と制度的事実（institutional fact）（あるいは社会的事実（social fact））という二分法である．サールは初期のSpeech Acts（邦訳『言語行為』）からThe Construction of Social Realityに至るまで，これらの概念を洗練させつつ議論を展開する．これらの概念をめぐるサールの議論の眼目は，自身の言語行為論を，個々の発話行為というミクロ的場面から社会的ないし共同的行為というマクロ的場面まで敷衍的に展開することにある．

しかし，ウォルトン自身が指摘するように，言語行為論とメイクビリーヴ説には埋めがたい対立点が存在する（Walton 1990, pp. 77-81, 邦訳77-81頁）．サールの言語行為論では，虚構について語ることは，現実の事実に対して行われる「真剣な（serious)」言語使用に寄生的な（parasitic）言語使用とみなされる（Searle 1969, p. 78, 邦訳141頁）．この見解をウォルトンは強く批判し，ごっこ遊び的行為は真剣な行為から派生するのではなく，独自の地位を確保していると主張する．このため，ウォルトンのメイクビリーヴ説を展開する際に，サールの言語行為論それ自体と接続することは困難である．

しかし，このような困難にもかかわらず，本稿ではサールの生の事実と制度的事実という二分法がメイクビリーヴ説の根幹をなす虚構と現実との二重性を明らかにするために有益な方針であることを示す．ウォルトンとサールを接続することにより，社会哲学に対する新しい視座を提示することができれば，本稿の目的は達しうるだろう．

2．ウォルトンのメイクビリーヴ説

以下では，ウォルトンの理論を素描し，その中心的な考えを確認しよう．

ウォルトンの理論の基本的アイディアは，虚構を語ることがある種のごっこ遊びに他ならないというものである．このアイディアを確認するために，ある話者が友人に対して「今晩サンタクロースが来るね」と発話する場面を例にとろう．この話者の発話に含まれる「サンタクロース」という名前は，サンタクロースが実際には存在しないため，いかなる対象も指示しない．しかし，ウォルトンの考えでは，話者は「ふりの内側で（within the pretense)」サンタクロースが存在し，それを指示するふりをしているとみなされる[(2)]．このような文を使用する話者は，虚構として（fictionally）真であると真剣に主張しているのである．

ウォルトンはこのような「ふり」を「メイクビリーヴ（make-believe)[(3)]」という概念によって説明する．しかし，「メイクビリーヴ」という概念には注意が必要である．ウォルトンの用いる「make-believe（メイクビリーヴ)」という概念は，「believe（信じる)」と対比される心的態度である．通常，主体は現実世界で成り立っている事実を信じる．したがって，「belief（信念)」は，信じられている端的な事実的内容に相当する．これに対し，メイクビリーヴは，ごっこ遊びにおけるように，事実ではないとわかっているが，信じることにするという心的態度である．「信じることにする」というのは，現実世界で成り立っている事実であると端的に「信じる」のではなく，何らかの虚構的事実の設定を，自ら事実であるかのように「信じることにする」という趣旨である．

ウォルトンの「虚構的真理」と「メイクビリーヴ」は，非常に独特の関係によって結び付けられている．これを

理解するために，ウォルトンの挙げる例を検討しよう．

エリックとグレゴリーという二人の人物が森を散策している．エリックはグレゴリーに「切り株がクマだということにしよう」と提案し，グレゴリーは同意する．このとき，切り株をクマにみたてるごっこ遊びが始まる．このごっこ遊びを「切り株＝クマごっこ遊び」と呼ぶことにしよう．切り株＝クマごっこ遊びでは，すべての切り株がクマとみなされることになる．したがって，グレゴリーが「そこにクマがいるよ！」と言う場合，エリックに注意を促し，同意を求めることができる．「そこにクマがいる」というグレゴリーの発話が表現する命題は，現実世界の中で観察報告として成り立っているのではなく，そのごっこ遊びの中で虚構として成り立っているのである．ウォルトンは「虚構的」という語を，「ある想像上の世界ないし状況で成り立っている」という意味で用いている[(4)]．したがって，「クマがそこにいるという命題は，そのごっこ遊びの中で虚構として成り立っている（the proposition that there is a bear there is fictional in the game)」ということを表現する（Walton 1990, p. 37, 邦訳 37 頁）．

しかし，ウォルトンは，ある事態やことがらを想像したからといって，それが虚構的になると主張するわけではない．ウォルトンによれば，何かを想像することは，そのことが虚構的である（虚構として成り立つ）ことの十分条件ではない．エリックとグレゴリーは「そこにクマがいる」と思って，茂みの中に隠れているクマに用心深く近づいていったとしよう．だが近寄ってみると，それは苔の生えた岩であり，切り株ではなかった．切り株＝クマごっこ遊びでは，クマとみなされるのは切り株だけであり，岩はクマとみなされない．したがって，このケースでエリックとグレゴリーが「そこにクマがいる」と思ったのは，間違いだったことになる．この場合，エリックとグレゴリーは「あそこにクマがいる」と確かに想像したが，この想像は「そこにクマがいる」という命題を虚構として成り立たせるわけではない（ibid.）．さらに，森の薮の中に，エリックもグレゴリーも気づいていない切り株が一つあるとしよう．このとき，「その薮の中にクマがいる」という命題は，二人のごっこ遊びにおいて虚構として成り立つが，二人ともそれに気づいていないのだから，このことはいかなる者も想像していない．このことは，虚構的であるからといって，想像されているとはかぎらないということを示す（ibid.）．したがって，何かを想像することは，そのことが虚構的であることの必要条件でもない．田村の一節を借りれば，「想像することと虚構的であることは，別の文脈に属す概念」であり，「想像することは認識の様態であるが，虚構的であるということは存在の様態なのである」（田村 2013, p. 18）．このように，薮の中の切り株は，いかなる者もそれに気づいていない場合でも，「その薮の中にクマがいる」という命題を切り株＝クマごっこ遊びの中で，虚構として成り立つようにしている．したがって，ウォルトンにおける虚構的真理とは，「虚構として成り立っていること（虚構的なこと）」に他ならない．

ここで重要なことは，切り株＝クマごっこ遊びにおいて，切り株という物体が，「あそこにクマがいる」や「その薮の中にクマがいる」のような虚構的真理を生み出しているということである．このように，虚構的真理は，ある設定のもとで，特定の物体によって確立される．このような，当該の設定の下で成り立つ命題を生み出す役割を果たす物体をウォルトンは「プロップ（props）[(5)]」と呼ぶ．

> いったい何がこのこと［引用者注，そこにクマがいるということ］を虚構として成り立つようにしているのか．それは，その切り株なのである．その切り株は，かくして一つの虚構的真理を生みだしている．これがプロップである．小道具たちは虚構的真理を産み出すものなのだ．プロップとは，その性質または実在によって，命題を虚構として 成り立つようにする物体（things）なのである．雪のお城はプロップである．それは櫓と濠を備えた（本物の）お城が存在するという命題の，虚構としての成立の原因である．お人形は，子ども遊びの中で，金髪の女の子がいるということを虚構として成り立つようにしている．（Walton 1990, pp. 37-38, 邦訳 38 頁）

ウォルトンによれば，プロップはある設定の下で，あることを誰かが想像しているかいないかに関わりなく，ある命題を虚構的真理として生み出す．エリックとグレゴリーのケースでは，薮の中の誰にも気づかれていない切り株もまた，切り株をクマと見なすという取り決めのもとで，「そこにクマがいる」という命題を虚構として成立させる．エリックとグレゴリーの間の取り決めが，二人のごっこ遊びを設定し，切り株をそのプロップとし，切り株によって虚構的真理が生み出されるようにしている．この種の取り決めや了解，合意といったものが，虚

構的真理を生成する根底にある．ウォルトンは，これを「生成の原理（principles of generation)」と呼ぶ．

> プロップは，誰かが現に想像していたりいなかったりすることがらから独立に，虚構的真理を生みだす．しかし，まったくそれ自身だけで，(現実のまたは可能的な）想像する人間たちと別個に虚構的真理を生みだすわけではない．プロップは社会的な設定の中でのみ，あるいは少なくとも人間的な設定の中でだけ機能する．茂みの中の切り株は，ごっこ遊びにおける慣習や理解や合意にもとづいてのみ，そこにクマがいるということを虚構として成り立たせる．この場合は，どこでも切り株があるところはクマが虚構的に存在する，という合意がある．私はこういう慣習や理解や合意を「生成の原理」と呼ぶことにしたい．(Walton 1990, p. 38，邦訳 38-39 頁)

ある物体がプロップであるということは，ごっこ遊びの参加者の間で明示的または暗黙的に取り決められた生成の原理を体現しているということである．しかし，ある物体を用いて想像することが，プロップが担う生成の原理に従うというわけではない．たとえば，ジョンとメアリーが砂場でお城を作るごっこ遊びをしているとき，ジョンが落ちているペットボトルを眺めて「あのペットボトルはロケットみたい」という個人的な空想をしたとしよう．このとき，このペットボトルはプロップとしてジョンとメアリーの間で取り決められた規則（生成の原理）を担わない．ジョンとメアリーは，ペットボトルを何かにみたてるごっこ遊びをしているのではないため，ジョンの空想はお城を作るごっこ遊びの中でいかなる虚構的真理ももたない．たとえ，独りでごっこ遊びをするとしても，何を何にみたてるかという生成の原理は，規則一般の本性として，本質的に共同的・社会的な水準にある (Walton 1990, pp. 38-39, 邦訳 40 頁)．

プロップが担う生成の原理は，ごっこ遊びの参加者に対して，ある特定の想像をすることを命令する．ごっこ遊びの参加者は，そのようなプロップが発する命令に従って，ごっこ遊びをするのである．しかし，ごっこ遊びの文脈の中で，不適切な想像が生じる場合がある．エリックとグレゴリーの切り株＝クマごっこ遊びの中では，切り株をクマであると想像することは適切であるが，岩をクマであると想像することは不適切である．

> ある想像はその文脈において適切でふさわしいが，別の想像はそうではない．ここに虚構的真理という概念の大事な手がかりがある．簡単に言えば，虚構的真理は，ある文脈においてあることを想像せよという指令ないし命令が在る，ということにおいて成り立つのである．虚構的命題とは，実際に想像されているかどうかにはかかわらず，想像されるべき命題なのである．(Walton 1990, p. 40, 邦訳 40 頁，強調原文)

ウォルトンによれば，ごっこ遊びの中であることが虚構として成り立つのは，参加者がプロップの発する命令 (生成の原理）に従って想像することに依存する．「そこにクマがいる」という命題が虚構的であるのは，その命題を想像することが，その遊びの規則によって命令されているということによって成り立っている．ウォルトンは，このような規則が，「ある条件が成立するならば一定の事柄が想像されなければならない」という条件的規則であると主張する（ibid.)．「そこにクマがいる」という命題が虚構的であるのは，ある場所に切り株があったら，そこにクマがいると想像せねばならない，という規則にエリックとグレゴリーが従う場合に限る．そして，このような条件的規則はプロップの存在に依存し，プロップが虚構的真理を生成するのである[(6)]（ibid.)．

このようにウォルトンは，虚構として成り立つ事柄とは，ある命令に沿って想像されるべき諸命題のことであると考える．命令がプロップという物体によって担われている場合，虚構的な真理は，ごっこ遊びの参加者の想像や思考から独立に成り立つことになる．このため，薮の中の切り株に気づかないということによって，「そこにクマがいる」という虚構的真理に気づかずに，虚構的真理について間違うこと，すなわち間違ってクマがいないと思い込んでしまうこともできる．「エリックとグレゴリーは，虚構として（fictionally）薮の中にクマが隠れているのを発見して，本当にびっくりする」ということにもなる（Walton 1990, p. 42，邦訳 44 頁)．エリックとグレゴリーの驚きを作り出しているのは，プロップとしての切り株である．つまり，プロップは虚構的真理にごっこ遊びの参加者から独立した客観性を与えるのである．

このような虚構的真理の集合によって，ある想像上の世界が形成される．この想像上の世界が虚構世界（fictional worlds）である．ウォルトンは，「認識する人々とその経験からの独立性をプロップが与え，虚構世界での私たちの冒険がわくわくするものになるのに大いに貢

献する」と主張する（ibid.）.

> 虚構的世界は，現実と同じく「すぐそこに（out there)」存在していて，私たちがそうしようと思えば，可能な範囲で探索したり探検したりすることもできる．虚構的世界を「人々の想像する絵空事」として片付けることは，それを侮辱し過小評価することなのだ．(ibid.)

このように，ウォルトンは，人々と物体との想像を介した関わりから，虚構世界が生まれ出ると考える．エリックとグレゴリーのごっこ遊びが生み出す虚構世界は，切り株という物体が与えるもう一つの世界として，われわれの目の前の「すぐそこに」広がっている．しかし，ここで強調しなければならないのは，ウォルトンが，虚構的対象やその対象にかかわる虚構的命題からなる虚構世界を，現実世界と同様の実体性を有してはいない，とみなすことである．この点においてウォルトンは，空名の指示対象からなるドメインを想定するマイノング主義やフィクションが現実として成立する可能世界にうったえるデイヴィド・ルイスたちが採用する，虚構の「実体化戦略」とは決定的に異なる．つまり，ウォルトンによれば，エリックとグレゴリーのケースにおけるクマは，切り株をプロップとするごっこ遊びの中で，生成の原理に従うメイクビリーヴ（虚構としての信念）の内側においてのみ存在する．ある事態が虚構として成立する虚構世界とは，プロップと生成の原理から個々人が生み出す，可変的ないわば「プラグマティカル」な世界なのである．

ウォルトンは，話者が物語の内容やフィクションのキャラクターについて言明する場合にも，この上述のごっこ遊びと同様の仕方で解釈される．つまり，われわれは，フィクションの物語が現実の真なる説明（true account of reality）である，というふりをしているのである．たとえば，シャーロック・ホームズについて話す場合，われわれはそのような人物が存在し，天才的な推理力をもち，ベーカー街 221B に下宿する，などのふりをする．つまりわれわれは，「シャーロック・ホームズ」という空名が指示対象をもち，それら名前を含む文が命題を表現し，それらの命題を信じる，というふりをしているのである．このようなごっこ遊びでは，コナン・ドイルの創作したホームズ物小説が小道具の役割を果たす．そして，小道具と生成の原理は，ごっこ遊びに参加する人がどのようなふりをしなければならないか，そしてごっこ遊びの内側でどのようなことが真なのかを決定する．著しく小道具と生成の原理から逸脱したごっこ遊びは，通常は正当なものとは認められない[7]．

このように，ある話者が「シャーロック・ホームズは探偵だ」のような文を使用するとき，その人はシャーロック・ホームズの存在を含むホームズ物語の解釈という一つのごっこ遊びをしているのである．その人がそのごっこ遊びの内側で使用するならば，「シャーロック・ホームズ」という空名は虚構として対象（シャーロック・ホームズ）を指示し，そのような名前を含む単称文も真なる命題を表現するふりをしているのである．

３．制度とごっこ遊び

前節ではウォルトンのメイクビリーヴ説を検討してきた．注目すべき点は，その理論が虚構を語る際を，ある設定にそって実際には事実ではない出来事があたかも生起しているかのように「信じることにする（メイクビリーヴ)」という心的態度によって説明することである．この着想をもとに，以下ではウォルトンの理論を拡張する試みを検討してみよう．

ウォルトンの近年の著作 In Other Shoes（2015）では，スポーツ観戦や音楽鑑賞などが検討されている．これらの出来事は，通常は絵画，映画，文学作品の鑑賞などの典型的な虚構とは通常区別される．しかし，ウォルトンはスポーツ観戦や音楽鑑賞なども受容者の現実の出来事に対する心的態度とは区別される特殊な心的態度によって成立することを示唆する．

このことを議論するために，ボクシングを例にとろう．この競技は，言うまでもなくリング上で二人の選手が殴り合うスポーツであり，観戦者はリング外から選手の試合を応援する．ここで重要な点は，ボクシング選手の試合中の行為は，相手を殴るという行為であり，外見的な類似性からみれば喧嘩や暴行と同種の行為に他ならないということである．しかし，われわれはボクシングの試合の観戦と，喧嘩の現場を目撃することでは異なる態度を示す．われわれが喧嘩を目撃したときには，仲裁に入ったり，その場から立ち去ったり，警察に通報したり，様々な反応を示すが，ボクシングを観戦しているときにはこれらの反応を示すことはありえない．ボクシングも喧嘩も相手を殴るという同種の行為が繰り広げられているにもかかわらず，われわれはなぜこのような態度の相違を示すのだろうか．

容易に思いつく回答は，ボクシングというスポーツを

成り立たせるための制度や規則が存在し，われわれが理解しているからに他ならないというものである．このような制度を前提とすることによって，はじめてスポーツの観戦が可能となる[8]．ここで注意すべき点は，制度や規則を前提とすることによって，現前の出来事ないし行為を特定の出来事ないし行為とみなすことにしていると解釈することができることである．すなわち，われわれは，ありのままの行為と，それを制度や規則に即して解釈した特定の行為へと読み替える二重の態度を使い分けているのである．

この態度の二重性はごっこ遊び的行為の本質的な性質である．例えば，幼児のままごとでは，ありのままの行為は泥団子が載せられた玩具の皿を手渡すに過ぎないが，特定の設定下のままごとの中では，妻が夫に夕食を配膳するというごっこ遊び的行為へと読み替えられる．同様に，先に取り上げたボクシングの例では，われわれが目にしているのは二人の人物の殴り合いに過ぎない．しかし，特定のルールや制度下では，ボクシングというスポーツへと読み替えられているのである．このようなありのままの行為とごっこ遊び的行為の二重性は，虚構，演技，遊戯，スポーツなど特定の領域以外の日常的な社会的行為にも広くみられる．以下ではこの点について検討しよう．

4．ごっこ遊びとしての社会的行為

ジョン・サールは，『言語行為』において生の事実（brute fact）と制度的事実（institutional fact）という二つの概念を区別する（Searle 1969）．サールは生の事実の例として，「この石はあの石のとなりにある」という単純な観察による知識から，「二物体は，両者間の距離の二乗に反比例し，かつ，両者の質量の積に比例する力で引き合う」という物理学の知識，さらに「私は痛みを感じている」という私的経験などを挙げる．これらの事実は，社会的制度を前提としないありのままの事実が含まれる．これに対して，制度的事実の例としては，「スミス氏はジョーンズ嬢と結婚した」，「ドジャースは 11 回まで戦って，3 対 2 でジャイアンツを下した」，「グリーンは窃盗罪で起訴された」，「議会は特別支出法案を承認した」などが挙げられる．サールは制度的事実について以下のように説明する．

> 結婚式，野球の試合，公判，立法行為などというものには，さまざまな身体動作と身体状態と直接的感覚が含まれているが，それらの出来事の一つをこれらの要素によって特定することのみによっては，結婚式，野球の試合，公判，立法行為としてそれらの出来事を特定したことにはならない．身体に関する出来事と直接的感覚がそのような出来事の一要素足りうるのは，ある種の制度を背景にして，さらに，別種の条件が加えられたのちのことである．(Searle 1969, p. 51, 邦訳 89 頁)

サールのこの区別の眼目は，われわれが事実とみなすものごとを社会的制度に対する依拠によって分類するということにある．制度的事実は，生の事実とことなり，社会制度を前提とする．上述の例では，婚姻関係が成立するためには，婚姻制度が存在しなければならず，野球の試合の結果は野球という制度が存在しなくてはならない．さらに，サールは「わたしは今 5 ドル紙幣を手にしている」ということも，貨幣制度が存在して可能になると指摘する．つまり，貨幣制度が存在しなければ，手中にあるのは模様が印刷された紙片に過ぎない．このように，われわれの社会における多くの行為および事実はさまざまな制度によって構成されているとサールは指摘する[9]．

サールはこのような制度的事実が依拠する「制度」を構成的規則の体系と特徴づける．

> あらゆる制度的事実の根底には，「C という文脈において X を Y とみなす」という形式をもつ規則（の体系）が存在している．ところで，われわれが採用する仮説は，ある一つの言語を使用することは，構成的規則に従って行為を遂行することであるというものである．これゆえにわれわれは，さらに，あるひとりの人がある種の言語行為，例えば，約束を遂行したという事実はまさに制度的事実であるという仮説をもまた採用することになる．(Searle 1969, pp. 51-52, 邦訳 90 頁，強調引用者)

ここで重要な点は，サールが制度的事実の根底にある規則をある事実 X を別の事実 Y へとみなすという形式をもつとみなすことである．われわれの議論に立ち戻れば，このような制度的事実の規則は，ごっこ遊び的な「あるものを別のものにみたてる」という二重性に対応するだろう．われわれの社会生活におけるさまざまな場面はこのような二重性を有している．例えば，生の事実は目の前で男が喋っているということに他ならないが，教育制度などの様々な社会制度を前提にすることによって，大学で哲学の授業を行うなどの制度的事実として解釈され

直す．つまり，生の事実と制度的事実はコインの裏表のように互いに相補的関係にあるとみなすことができるだろう．

サールは Searle 1995 においてこのような生の事実と制度的事実を社会的事実という観点からさらに展開する．サールが生の事実と制度的事実を分類するのは，社会的事実の構成基盤のひとつとして集団的志向性（collective intentionality）を取り扱うためである．集団的志向性は，社会組織を構成する個人と個人をつなぎ合わせる心の共同性である（中山 2004, 2 頁）．生物体が細胞からなるように，社会組織は多数の個人からなる．生物体を構成する細胞と細胞をつなぎ合わせる原理が相互作用と相互依存を可能にする物質代謝にあるならば，社会組織を構成する個人と個人をつなぎ合わせているのが集団的志向性である．サールは，社会的事実を，集団的志向性をまきこんでいく事実と定義する（Searle 1995, p. 26）．中山は，「二人で一緒に散歩に行くことなども社会的事実となる」という例を挙げる（中山 2004, 112 頁）．

サールの定義に従えば，われわれがごっこ遊びに参加し，虚構を想像することもまた，社会的事実である．ごっこ遊びは，複数の個人が共同的行為を行うという意図をもつことによって成り立つ．たとえば，第 2 節で検討した切り株をクマにみたてるごっこ遊びをするエリックとグレゴリーのケースを例にとろう．エリックとグレゴリーは，お互いが切り株をクマにみたてているということを理解し，またそのことを理解しているということを理解している．この集団的志向性によって形成された共通基盤（common ground）の上にごっこ遊びは成立する．ウォルトンは以下のように述べる．

> 集団的な想像（collective imaging）と私［ウォルトン］が呼ぶ社会的活動は，想像されるものにかかわる単なる一致以上のものを含んでいる．違う参加者が多くの同じことを想像するというだけではなく，それぞれの参加者が，自分の想像していることをほかの人々も想像しているということがわかっており，またそれぞれ，ほかの人々がこの点をわかっていることがわかっている．さらに，こういう一致が成立していることを確かめる手続きも成り立つ．そして，それぞれの参加者は，出来事が適切に進行する限りで，ほかの人々が想像しそうなことに関して，理由のある期待を抱き，正しい予測を行うことができるのである．（Walton 1990, p. 18, 邦訳 17-18 頁，下線部は引用者による．）

このウォルトンの集団的想像の説明は，集団的志向性のサールの定義と極めて近い発想に基づき，虚構を想像することの共同性と社会的事実の側面を捉えている．この共同性を説明する際に鍵となるのが，上記引用の下線部にあたる部分である．この下線部は，相互信念（mutual belief）と呼ばれるものに相当し，トゥオメラは以下のように定式化する（Tuomela 2002, p. 34fn.）．

(IA) x と y が p という相互信念をもつというのは，両者が p という信念をもつとともに，相手も p と信じているとお互いに思い，場合によっては，これが無限に続くということである．

(RA) x と y が p という相互信念をもつというのは，両者が p という信念をもつとともに，p ということが両者によって相互に信じられているとき，かつ，そのときに限る．

前者（IA）は反復的説明（iterative account）と呼ばれ，後者（RA）は反射的説明（reflexive account）ないし不動点的説明（fixed-point account）と呼ばれる．信念についての合理性の規定を加えると，相互信念についての無限に続く反復的説明から，反射的説明が帰結することをトゥオメラは示唆する（Tuomela 2002, p. 35, 中山 2004, 115 頁）．トゥオメラはここから，サールの集団的志向性を精密にした「共有されたわれわれ-態度 (shared we-attitude)」を導出する（Tuomela 2002, p. 39）．

> x が p という，われわれ態度をもつのは，次のことが成り立つときである．
>
> x が p という態度をもち，さらに x が次のことを信じている．
>
> すべての人が p という態度をもち，さらに，すべての人が p という態度をもつということが，グループ G の相互信念となっている．

切り株をクマにみたてるごっこ遊びをするエリックとグレゴリーのケースでは，エリックとグレゴリーのあいだに「切り株をクマにみたてる」という態度が相互信念となっている．エリックが茂みを指して「あそこにクマがいるよ！」とグレゴリーに言ったとしよう．この場合，エリックは「切り株＝クマごっこ遊びにおいて，あそこにクマがいる」というごっこ遊び信念（make-believe）をもち，さらにグレゴリーもまた同じ信念をもち，このことが切り株＝クマごっこ遊びの参加者集団の相互信念

となっている．ここでは，エリックとグレゴリーは，ごっこ遊び的信念をもつが，これはトゥオメラが定義する「共有されたわれわれ―態度」に相当する．

ここまでの議論を振り返ろう．サールの眼目は，社会の中の現実と呼ばれうる事実とは何かを定義することであった．サールは生の事実と制度的事実の区別から，われわれが社会において保持する共同性の見取り図を描こうとする．このような共同性は，ウォルトンのメイクビリーヴ説が主張する集団的想像という視座と重なり合う．ここで浮かび上がる選択肢の一つは，社会的事実をある種の虚構とみなすことである．すなわち，われわれは社会的制度に従い，生の事実を社会的事実にみたてるごっこ遊びを行っていると考えるという選択肢である．これは，子供が別の子供に泥団子を手渡すという行為が，ままごとの中で食事を配膳するという行為へと読み替えられるという二重性と対応する．つまり，われわれが社会生活において行っている制度的事実も，それを支える社会制度をはぎ取れば単なる生の事実に他ならない．しかし，社会における様々な制度を前提としたある種のごっこ遊び的行為として読み替えることによって制度的事実が生み出されるのである．

この帰結を受け入れれば，われわれの社会生活におけるほぼすべての領域がある種の虚構であることが明らかになる．ボクシングの試合を行う行為も，その前提となる制度をはぎ取れば，ただ殴り合いを繰り広げたという行為に過ぎず，大学で哲学の講義を行うという行為も，ただ人前で話しをするという行為に過ぎない．しかし，このようなほとんど無内容な単なる生の事実だけではなく，われわれが社会生活を送るためにはその行為を制度的事実として読み替えるごっこ遊び的行為が必要となる．換言すれば，ごっこ遊び的行為は，われわれの社会を支える共通基盤として機能するための虚構を生み出す源泉とみなしうるだろう．

5．むすびに

本稿では，ウォルトンのメイクビリーヴ説を参照し，その理論の社会哲学に対する応用を検討してきた．ウォルトンはみずからの立場を次のように概括している．

> プロップは，慣習化された生成の原理の力によって，想像の仕方を命令する物体である．想像するように命令された命題は，虚構的命題である．与えられた命題が虚構的であるという事実は，虚構的真理である．虚構世界は，虚構的真理の集合と結びついている．虚構的なものは，与えられたある世界―たとえば，ごっこ遊びの世界や，表象的藝術作品の世界―において虚構的なのである．(Walton 1990, p. 69, 邦訳 70 頁，強調原文)

このように，ウォルトンは，美学と藝術鑑賞の理論を構築するために，プロップと生成の原理によって命令されたメイクビリーヴという概念によって，人間の虚構を作り出す想像力を説明する．つまり，ウォルトンは現実世界に存在しないものについてわれわれがコミュニケーションできるのかという問題から出発し，われわれが虚構ゲームをするための想像の力を明らかにする，「虚構の哲学」を探求する．ウォルトンの虚構の哲学の顕著な特徴は，物体が想像の仕方を命令し，このような命令を発することが物体の社会的機能である，という点である．物体に媒介された想像活動の共同性という現象が，ウォルトンの理論の核心である．その背景には，われわれが様々な物体を介して想像が作り出す虚構世界を同調させながら社会生活を送っている，という基本的事実がある（田村 2013, p. 31）．

本稿の議論は，このようなごっこ遊び的行為が社会生活を成立させるための制度的事実を生み出すというものである．このように考えれば，われわれの社会生活はある種の虚構とみなさなくてはならない．しかし，このことはわれわれの社会がでっち上げられた空想の産物であることや，嘘偽りの存在であることを示唆する破壊的な帰結を意味するのではない．むしろ，ウォルトンのメイクビリーヴ説を受け入れれば，ある社会集団においてその構成員が相互に共同的行為を営むための想像的なコミュニケーションの可能性を提示しているのである．このことは，われわれの社会において，なぜ芸術や文学などの虚構なるものが存在するのかを明らかにするための手掛かりになるだろう．すなわち，メイクビリーヴ説は，虚構が単なる個人的な空想や想像ではなく，その想像や空想を他者と共有し，共同的な行為を生み出すということを示し，それを解明するためのモデルを提供しているのである．

最後に，残された課題として社会的事実ないし社会的行為というカテゴリーの再検討の必要性を指摘しよう．というのも，社会性には他者の意図を介在させた社会性と，それを介在させない社会性という二つのカテゴリーを含むと考えられるからである．例えば，金属片を投入

し，特定のボタンを押したのちに排出されたプラスチック製の容器を手に取るという単なる生の事実とは異なり，自動販売機のボタンを押してジュースを購入するという事実ないし行為はある種の社会性をもちうる．しかし，ジュースを購入する人物は，その自動販売機を設置した人物の意図やジュースを補給し，硬貨を回収する人などの意図を読み取って行為を行うわけではない．つまり，この種の社会的事実ないし行為は他者の意図の前提とは無関係である．これに対し，他人に話しかけたり，サッカーでパスを出したりするなどの社会的事実ないし行為は，必然的に他者の意図を前提とし，少なくともそれを読み解き，シミュレートする必要がある．つまり，自動販売機のボタンを押すのとは異なり，他者に話しかけるという行為は，他者が自分の意図を理解し，かつそれに対する応答を期待して行われる．そして，サッカーのパスを出すことは，典型的には味方選手が自分の意図を理解し，かつフリースペースにボールを蹴ったところに味方が走り込むことを期待して行われると考えられる．他者に話しかけることは，何も意図せずに呟いた独り言に対して偶然的に他者が応答することではなく，またパスを出すことは適当に蹴ったボールが幸運にも味方選手に渡ることではない(10)．

このような他者の意図を介在させた社会的事実ないし行為は，誤解を恐れずに言えば，ある種の政治性を含むとみなしうる．このような政治性は，他者との関わりの中から生み出される特定の関係に他ならない．しかし，このような政治性と虚構との関わりについての分析は本稿の目的を超えるので別の機会に譲らなくてはならない(11)．

脚注

(1) ウォルトンの影響は狭義の美学や藝術理論にとどまらず，遊戯にかかわる著作に影響を与えている．一例をあげるならば，クリス・ベイトマン（Chris Bateman）の著作 Imaginary Games（2011）は，テレビ・ゲームにかかわる理論的基礎としてウォルトンの説が援用されている．(ベイトマンはゲーム・デザインが本職で，在野の哲学者としても活躍しているとのこと．)

(2) 同様の見解は萌芽的にはエヴァンズによって主張された (Evans 1982, p. 368)．

(3) ウォルトンは「信じることにする（make-believe)」という術語を「ふり（pretense)」と交換可能な仕方で用いる．

(4) 田村 2013 はウォルトンの「虚構」に対して以下のように注意を促している．

> 「虚構的」という訳語に現れる「虚」という字に惑わされて，「fictional 虚構的である」ということを「本当は成り立っていない，嘘である」というように取ってはならない．「fictional」は，「虚構として成り立つ」，あるいは「虚構を構成している」などと訳出する方がよいだろう．(田村 2013, p. 18)

以下では田村 2013 の指摘に従い，「fictional」については，「虚構的」という訳語と併せて，文脈に応じて「虚構として成り立つ」といった説明的な訳語を用いる．

(5) 「props」には，「（演劇や舞台などの）小道具」という意味もあるが，同時に「支柱」という意味もある．ウォルトンはこの語に〈ごっこ遊びを成り立たせるための小道具〉という意味と，〈（それなしには成り立たない）ごっこ遊びを支える柱〉という意味を込めている．したがって，以下ではこの両義性を表すために，「プロップ」という訳語を当てる．

(6) ウォルトンは，前述のように，生成の原理が明示的である場合の他に，暗黙的であるケースや，生成の原理に従っていると気づかないケースも想定する．

> 原理がとても深く根付いているので，ほとんどそれに気づくことができないこともある．また，あまりにも自然なのでその原理を持たない状態を思い描くことが難しいこともある．私たちがある原理を備えて生まれてきたとか，それを獲得するほとんど抵抗しがたい傾向を備えて生まれてきたということもありうる．(Walton 1990, p. 41)

このようなケースでも，生成の原理は，どんな状況でどんなことが想像されるべきかについて，条件付きの命令を形づくるとウォルトンは主張する．

(7) しかし，ウォルトンは「権威づけられたゲーム（authorized game)」と「権威づけられないゲーム（unauthorized game)」を区別することにより，個人的な設定によるごっこ遊びの可能性を認めている（cf. Walton 1990, pp. 51, 60, 397-8)．なお，ゲームの「権威づけ」という区別は厳密なものではなく，どのゲームが権威づけられたゲームとして認められるかは，時代や文化などによって左右される流動的かつ可変的なものである．

(8) 同様に，音楽鑑賞においても，聴衆は特殊な態度を示していると考えることができる．例えば，深夜に大音量のステレオで音楽を聴いている人とその同居人を考えてみよう．この二人は同一の空気の振動を耳にしているにもかかわらず，一方はそれを音楽として聴き，他方は騒音と感じることは想像に難くない．つまり，物理的な音響としては同一であるにもかかわらず，聴衆の態度によって音楽かどうかの受け取り方は変化すると考えることができる．

(9) ここで生の事実と制度的事実の区別について 2 つの注意が必要である．1 点目に，この区別が恣意的ではないか，もしくはすべての事実は何らかの制度を前提としており，生の事実というカテゴリーが成立しないのではないかという批判が十分に想定できるという点である．たとえばサールは「わたしの体重は 160 ポンドである」という事実を生の事実とみなす．この事実は体重測定と質量単位の制度を必要とするだけではなく，さらにその事実を言葉によって述

べるための言語的制度をも必要とする．しかし，サールはこのような制度の存在を認めつつも，そこで述べられた事実そのものは生の事実であると主張する．

2 点目に，「わたしの体重は 160 ポンドである」という言明によって述べられた事実は生の事実であるが，この言明が述べられたという事実は制度的事実であるということである．ここから，後述のように主張や約束のような言語行為を制度的事実とみなすサールの見解が帰結する．

⑽ もちろん，このようなケースでも結果的に会話が成立したり，パスが通ったりするとみなされることはありうる．しかし，これらのケースは典型的なケースではないため，ここでは検討の対象とはしない．

⑾ 政治をある種の虚構とみなす見解は，英米系の分析哲学ではマイナーな見解であるが，現代フランス思想ではラクー＝ラバルトやジジェク，エルネスト・ラクラウなどが積極的に議論を展開している．政治を虚構ないし擬制とみなす立場としては，布施哲『希望の政治学―テロルか偽善か』（角川学芸出版，2007 年）が本稿を補完する議論を展開している．

参考文献

Evans, G. (1982) The Varieties of Reference (edited by J. McDowell). Oxford: Clarendon Press.

Searle, J. R. (1969) Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language, Cambridge University Press. (邦訳『言語行為―言語哲学への試論』，坂本百大，土屋俊訳，勁草書房，1986 年)

———. (1995) The Construction of Social Reality, Free Press.

Tuomela, R. (2002) Collective Goals and Communicative Action, Journal of Philosophical Research, vol. 27, pp. 29-64.

Walton, K. (1990) Mimesis as Make-Believe. Cambridge, Mass: Harvard University Press. (邦訳『フィクションとは何か―ごっこ遊びと芸術』，田村均訳，名古屋大学出版会，2016 年)

———. (2015) In Other Shoes: Music, Metaphor, Empathy, Existence, Cambridge University Press.

田村均（2013）「虚構制作の根源性―ケンダル・ウォルトンの虚構論―」『名古屋大学文学部研究論集・哲学』第 59 巻，1-34 頁

中山康雄（2004）『共同性の現代哲学―心から社会へ』，勁草書房

成瀬翔（2014）「空名の指示の理論と現代フレーゲ主義の可能性」博士論文（名古屋大学）